
君が僕を待つなら～リヒとバッシュの場合～

しろめのくろねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が僕を待つなら〜リヒとバツシュの場合〜

【Nコード】

N6002M

【作者名】

しろめのくろねこ

【あらすじ】

心配性代表・バツシュさんと

お人よし代表・本田さんが

妹キャラ代表・リヒテンに振り回される話（笑）

ソノイチ（前書き）

今回はブラコン兄妹のお話です
あと菊さんもです！！

舞台はギリシャの海辺の港町。
さんさんと降り注ぐ陽光と潮風。日干し煉瓦で出来た可愛らしい建物。…全部妄想の街ですが一応ギリシャの国内って事にW

リヒテンに彼氏ができた？
お兄ちゃん、そんなこと許しませんからねっ！！！！
まあこんなお話。

では召し上がれ

ソノイチ

ぎらぎらとした陽光が降り注ぐ7月の下旬のある日のこと

テトラポッドが反射し、その眩しさ故か。海猫がよたよたと危なっかしく舞っていた

「あ、あれをみるのである!!」

「はぁ…」

どう考えても真っ青な夏の海と空のコントラストに釣り合わない暑苦しい二人がいた

伏せって双眼鏡でなにかを一心不乱に観察している

菊とバツシュだ

…ちなみに迷彩柄の軍服で。

「あれはどうみても…そ、そのいかがわしい仲ではないかつ」

バツシュは菊の襟首を掴んで噛み付くように言った

冷静な彼らしくない一面だ

「そうみえなくもないですか」

「絶対そうなのであるっ!!」

バツシュは犬歯を剥き出しにして叫ぶ

きいん、菊は耳を慌てて塞ぎ目を白黒させる

「お、落ち着いて下さい」

「落ち着いているっ!!」

どこらへんが？とツツコミを入れる間もなくバツシュは菊の首を強く押さえ付け唸っている

「バツシュさん、苦しい」

うぐるるる

「…バツ…シュさ」

ううううう

「……………バ」

菊は真つ青な空がぼやけていくのを感じながら何故こんな事になったのかを回想する

○○○○○○○○○○○○○○○○

本田菊の家の前で我輩は迷っていた

本田にこの非常に重要な問題についての協力を要請すべきか否かを。

そうこうしているうちに本田は片手に杓、片手に桶を持って現れてしまった

水まきにでも使うのだろうか

本田は我輩にすぐに気がついたようでぺこりと頭を傾け、おはようございますといった

我輩は覚悟を決めて話し掛けた

「リヒテンがここ数日間の昼間いないのである」

我輩は冷静に言った

…つもりだったが多少声が上擦っていたようで本田は少し困惑したような顔をした

「リヒテンさんが？何か事件に巻き込まれているとか…」

「い、いや。それはないと思うのである」

「？」

ええい、くそ。

伝えたい言葉がまとまらずにイライラする

「ようするに、リヒテンが…その、洒落た格好でどこかへ行ったから、つまりだな」

本田は目に見えて、”あ、そんなことですか”と言った顔をした

「遊びに出かけたとかでは？」

「リヒテンは我輩に何も言わずに遊びになど行かない」

「買い物とか」

「重い物を買うかもしれない。いつも一緒に行ってる」

我輩はすらすらと当たり前の事を言った

全く本田は！！何を当然なことを確認しているのだ、今はそれどころではないであろう？

本田はすごく微妙な顔で質疑を続ける

「…えーと、それでは。」

「まだ何か可能性があるのか？」

本田は我輩と目が合うと気まずげに視線を外した

隠し事か、いい度胸。

「そこに直れ本田っ！！なにを躊躇っているのか。さっさと吐いた
ほうが身のためだ」

本田は途端に背筋を伸ばし敬礼のポーズをとって言った

「恐れながら申し上げます！！リヒテンさんは…その、デートに出
かけたのではないかと」

セダーン

「ひええ…！！！」

「ほーんーだー…」

ありえない

そんなのはけしてあってはならないことである、もちろん

「そうであるなっ？」

「な、何がですか」

セダーン

本田は”今、耳の上風が通りましたっ”と騒いでいる

「り、リヒテンが他の男と居るだと。貴様いまそうつたな」

「は、はい」

我輩は息が上がるのも構わずに一息で言い切った

「なら共にこい。リヒテンがそんな軽薄な者ではない所、しかと見せるのである」

本田は一瞬泣きそうな顔をしたが、再び銃を向けるとため息をついて両手をあげた

我輩はようやく興奮が収まってきた

そうだ、なにを恐れる必要がある？

リヒテンが他の男と一緒に過ごしているだと、馬鹿馬鹿しい

そんなことあるはずない

あるはずないのだ。

…そうである、よな…？

○○○○○○○○○○○○○○○○

…というわけで今ここに至るわけです

「バツシュさんっ！」

「リヒが…あ…。す、すまなのである」

「しっかりして下さい」

「う、うむ」

菊はやつと手を離してくれたバツシュを少し責めるように窺めた

それにしても。

つい10分前を思い出して改めてこの状況に思いを馳せる

リヒテンと青年が並んで海の見回せるベンチに座ってるのを先に見つけたのはバツシュだった

その時の取り乱しっぷりといったら

菊はため息をついて、首にくっきりとついているであろうバツシュの指の跡をさする

まあ、私も驚いているんですけどね

なぜならその青年は

ギリシャだったから。

「二人は何をしゃべってるのであるか」

「少し遠くて聞こえませんか」

近づくに近づけない

なぜなら二人は迷彩服だったから…ハンパなく計算ミス。

二人の様子は菊からみればそんなにいちゃいちゃしているようには見えない

肩が触れ合う直前の距離を保ちながらリヒテンが時折膝の上において書籍を指差し、ギリシャがゆったりと頷いている

清いお付き合い。

…ていうか、普通にお友達なのでは…？

菊の素朴な疑問に、しかしバツシュは聞く耳を貸さない

「リヒテンに男の友人などいないのである…！」

「そうですか（作らせないの間違いでは？）」

こんな具合に。

「しかもリヒテン…あんなに可愛い格好をして」

「確かに」

菊は双眼鏡を再び覗き込む

リヒテンはベージュ地に華奢な華が染め抜かれた丸首で袖が膨らんだレース素材のワンピースにデニムをロールアップにして合わせている

髪には赤いガーリツシュリボンがアクセントになっていて可愛い
シンプルで飾り気がないが、もともと可愛く、華奢なりヒテンにはよくあっている

「本当にお可愛い」

「当然である」

バツシュは”なにを当たり前のことを”とでもいいただ

「あ」

菊の一声でバツシュは双眼鏡を即座に覗き込んだ

「手を振ってますね」

「帰るのであるか」

リヒテンとギリシャはお別れのキスを…するはずもなく

あっさりとそれぞれの帰路についていく

ふと周りを見渡せば薄く広がっていた雲に夕日が映り、美しい夕暮

れを迎えていた

「綺麗ですね…うわっ!？」

海に落ちかける夕日に心を奪われていた菊をバツシュはひよいと持ち上げ、立たせた

見た目はあまり体格差は感じていないが、やはり鍛え方がちがう

「我輩も帰るのである。リヒテンより先に家についていなければならんからな」

「そうですか」

そういいながらもバツシュは睨みつけるように菊を見続ける

「バツシュさん？」

それでも菊は怯えなくて済んだ

なぜならその眼は

迷子の猫のようであつたから

「本田、その、リヒテンは…」

「ええ、わかってますよ」

菊は少し吹き出してから海風のように穏やかに笑った

そしてわざとらしく真面目な顔を作つて言った

「リヒテンさんはバッシュさんのことが大好きですよ。誰よりも世界中の人が否定しても私が証人になります」

バッシュは俯いて足元の小石を蹴飛ばした

それから帽子を少しさげて菊に表情を読み取らせない角度で

「…つまらないことを言わせたのである。本田、感謝する」

そう言って

踵を返して駆け出した

「ふふふ」

菊は瞳を半分以上沈んでしまった夕陽の色に染めながら笑った

「そんなお礼を言われたら」

今日は朝から殺されかけ、散々連れ回されて、貴重な休日を軍服で過ごすはめになった

でも

どうして感謝を伝えたらいいか解らないといった顔で

一生懸命な拙い言葉で礼を言われるのなら

「明日も協力してもいいかな、とか。思っちゃいますよね」

菊は誰もいない夕暮れの港町を鼻歌を歌いながら帰っていった

○○○○○○○○○○○○○○○○

「リヒ」

「兄様、ただいまです」

「う、うむ」

「？」

家に帰ると兄様はリビングで本を読んでおられました

「兄様、ご本が逆ですよ」

「…ああ」

兄様はぼんやりとした様子でご本を裏返しにしました

そして…

「兄様、そのページはちょっと」

「ん？……………！！！」

ご本は私がハンガリーさんにかして頂いたお洋服の雑誌なのですが兄様の開いていたのは「この夏はセクシーデビュー！？可愛い下着をチラ見せしちゃえ！！」と大きく見出しがかかれていました

「ちが、こ、これはたまたま」

「分かってますよ」

「…うむ」

兄様がこんなにくるたえるのは珍しくて、私はほけーっとしてしまいました

「それにしてもリヒテン、き、今日はどこへ行っていたのであるか」
聞かれると思っていたから、私は用意していた答えを答えるだけでよかったのでした

「買い物をしていました。可愛い洋服があったので」

「…」

兄様は私をじっと見ていました

私は嘘がばれてしまったのかとヒヤヒヤしましたが、兄様がつい、

と視線を外して”そうであるか”と言ったので胸を撫で下ろしました

「兄様、私少し疲れたみたいです。早いけどもう寝ますね」

朝からギリシャさんとお話しをする予定ですし、それに

明日は、大切な、大切な日。

「リヒ」

「なんでしょう」

兄様はなにかいいたげに口を僅かに開いて、

緩く首を振った

「いや、なんでもないのである。おやすみ」

少し疲れたように微笑んで、それだけを言って目を伏せてしまいました

「おやすみなさい」

私はなんだか心にひっかかるなにかを感じたけれど

明日のことで頭がいっぱいでふわふわとしていたので、そのまま2階へ行こうと扉に手をかけ

少し考えた後で、ふと思いついたままのことを口にしてみた

「兄様は私が可愛い下着がちらりと見える服を着たら、どうおもいますか？」

ズルツ、ドシン

兄様は椅子からずり落ちました

「なああああ??」

「嘘です。おやすみなさい」

私は吹き出しながら2階の自室へと上っていききました

カーテンを引きかけて、あんまり月が綺麗だったので独り言を呟いていました

時々見られる冷静な兄様の

笑顔や、困った顔や、今みたいな慌てた顔が大好きです、と。

「おやすみなさい」

月にそう呟いて。

眠りに堕ちる寸前に、

夢でも兄様に逢えたらどんなにいいだろうと

そんな傲慢なことを一瞬だけ想って、眠りに堕ちました

…その頃のバツシュ

「リヒ…!!」

そんな格好、ギリシャの前でしたりはせぬよな？

我輩は認めないのである……!!

… 苦しい夜を過ごしたようです

○○○○○○○○○○○○○○○○○○

「そうして次の日です」

「誰に言ってるのであるか」

「いえ、独り言です」

菊とバツシユは再び晴天の港の樹木の陰に伏せていた

リヒテンは昨日と同じベンチでギリシャと真剣な顔で話をしている

「今日はなんだか深刻ですね」

菊は隣からの返事を待っていたがいつまでたっても返事がこない

？

横を見るとバツシユは双眼鏡を覗くこともせずに眉間にしわを寄せていた

「本田」

「はい」

「我輩は少し考えたんだが」

「…あ」

話の途中で菊は小さく声を上げた

バッシュは条件反射のように双眼鏡を手にとった

リヒテンが膝に置いていた紙袋から小さな木箱を取り出した

「なんでしょうか」

「…」

ギリシャは神妙な面持ちでそれを受け取り開けている

リヒテンもその様子を手を組んで祈るように手を合わせていた

ごくり

二人は同時に唾を飲み込んだ

そうして、出てきたソレは

…。

ギリシヤとリヒテンの微笑む顔が酷く残酷なものに思えた

「…っ」

バツシュは立ち上がると駆け足でその場を去っていく

「バツシュさんっ！！！！」

菊の声は今の彼には届かない

遠ざかる背中を、それでも菊は懸命に追いかけた

しかし二人の距離は開くばかりで。

曲がり角の多い小路でついに姿は見えなくなってしまった

「はあ、はあ…バツっ…シュさん…はあ」

菊は走るのをやめ、肩で大きく息吸った

途端に頭がぼうつとした

ソノ二

そして突如訪れたのは
自らの無力感への嫌悪で。

菊は傍の日干し煉瓦の壁を拳で叩いた

そのまま壁に重心を預けてなんとか息を整える

「なにかの間違いです」

さっきのはなんだ。

リヒテンとギリシャは本当に恋仲であるというのか

「そんな事ありえません」

だって

「だって」

そんなの

菊は唇を噛んでもう一度拳を煉瓦に弱々しくぶつける

「そんなの…報われなすぎるじゃありませんか」

声は途中から裏返り、掠れた

乾いた日干し煉瓦を濡らしたのは雨ではなく…。

しばらくして菊はふらふらと立ち上がると来た道を引き返す

「しっかりしろ本田」

意識して背筋を伸ばす

「なにやっているのだ、”ワガハイ”はのろまは嫌いだ」

バツシュの言葉を自分の声に重ねて、最後には走り出す

今の私にはバツシュさんを慰めることはできないでしょう

けど

まだ私には

確かめなきゃならないことがあります

菊は先程のベンチが視界の果てにうつった瞬間、さらにスピードを上げた

○○○○○○○○○○○○○○○○

「色々ありがとうございました」

リヒテンが髪を地面につけるぐらい深くお辞儀をしたから俺は少し慌てた

「俺はなにもしてない」

「いえ。貴重なお時間をたくさん奪ってしまいました」

「んー」

俺は別にどうでもいいけど

リヒテンがいてもいなくても、どっちにしろ毎日このベンチに寝転がって、猫なでたり猫なでたり猫なでたりするだけだし

初めてリヒテンがここに来たときは猫が見知らぬ人に警戒して近づいてこなかったけど

”にゃー”

「うふふ、あなた達もありがとう」

今ではすっかり打ち解けている

笑顔で猫を抱き上げて頬刷りしているのを見ると、和む

「あー、今日なんだよね」

俺は小指に嵌まったソレを抜きながら言った

「はいっ」

リヒテンは猫をぎゅうつと抱きしめながら幸せそうに微笑んだ

「リヒテン、猫が…」

”ふ、ふにゃー!!”

「!!!わあ、ごめんなさい」

リヒテンの腕でお腹を強く絞め上げられた猫は急いで俺の頭にはい
上がって警戒体制をとる

俺は苦笑する

猫と、リヒテン
その両方に。

「ほんとにあいつのことが大好きなんだな」

リヒテンは下を向いて首元のリボンを弄ってから少し頬を染めて困
ったように「すいません」と謝った

「なんであやまる？」

俺は心がくすぐられたような気分になった

変なの。

青い青い空を見て、猫を抱いて、波の音を聞いて、眠る

それは俺にとっても大切な、日々の祈りのようなものだ

”幸せ”とはそのことだとずっと思っていたけど

「ギリシャさん？」

「ん…」

自分よりあいつのことを何より一番に考えて、あいつの喜ぶ顔をみ

るために頑張るリヒテンを見ていると

ああ、そういうのも

幸せっていうのかもな、ってさ

なに言ってるんだろうね。俺

「わっ…ギリシャ、さん？」

「まあまあ。ちょっとだけ」

俺はリヒテンの細いブロンドの髪を撫でた

驚いたのか、リヒテンが背筋を強張らせる

「う……はい」

リヒテンはまるで拷問でも受けているようにぎゅっと目をつむっている

こつゆう感情表現になれていないのだろうか

俺が思う存分髪をいじくっていると後ろから足音と荒い呼吸が近づいてきた

「菊。」

「ギリシャ、さんっ…はあ、リヒテンさん…はあ、はあ。」

「すごい汗。どうなさったんですか」

リヒテンがハンカチをだそうとかばんに手をかける前に、菊は手の平でそれを制す

すーはー

大きく深呼吸をした後、大粒の汗を拭うこともせず菊は言った

「お二人に確認しなきゃならないことがあるんです」

○○○○○○○○○○○○○○○○

我輩はどこかも分からないままに走って走って走って、気づいたら海辺の寂れた公園にいた

公園と言っても名ばかりで遊具があるわけでもなく、ただベンチと、持ち主を待つスケートボードだけが忘れ去れたようにあった

「はあ」

ベンチには何故か座るのを躊躇い、脇にあった花壇の植え込みの囲いに腰掛ける

不足していた酸素が戻ってくると、比例するように先程の光景が網膜を内側から痛めつける

リヒテンがギリシャに渡していたもの

それは、指輪だった

指輪を付けたギリシャがリヒテンを見る眼差しは優しく、

嬉しそうに、本当に嬉しそうにリヒテンは笑った

「我輩はなにをしている？」

我輩は笑った。
自分を。

金がないこと、物がないこと。

そんなのは日常だった

だから失うことには慣れてた

なのに

「弱い」

我輩は自分は他のものより誇り高く、強い存在だと信じていた
だが甘かった

我輩はたった一人の大切な者がいなくなっただけで

こんなにも…
こんなにも、胸が乾くのだ

「リヒ…」

「なんでしよう、兄様」

「っ！??」

我輩はバランスを崩してアカンサスの花壇に転がり堕ちた

起き上がることも出来ずにいる我輩と、何を思ったかりヒテンはし

やがみ込み目線を無理矢理合わせた

「菊様からお話は伺いました」

「…そうであるか」

我輩はまともにリヒテンの顔を見れなくて目を逸らした

そして、無言の空気に耐え切れなくなって気づけば口が勝手に動きだしていた

「リヒがギリシャの奴と恋仲だったとは、知らなかったのである。驚いた。でもその、あれだ。今まで我輩はずっとリヒの事を妹として大切に、これでも大切にしてきたつもりだ。だがそれゆえにリヒを束縛しすぎたのかも知れないのである。我輩は…一人に慣れている、から、我輩の事は気にせず」

心にもない綺麗事を

リヒはその手の平で止めた

我輩は黙るしかなかった

「兄様、こちらを向いてくださいますし」

我輩は顔をあげたがどうしてもリヒの目をみれなくて、結局再び下を向いてしまった

その時、急に衝撃を感じた

「こちらを向け、と言ってるんですわっ!!」

リヒテンは我輩の襟首を掴んで無理矢理自分の方に向けたのだ

リヒは泣いていた

あんまり静かに涙だけを流すものだから、リヒは人形だったのか、と少し疑った

「私がどれだけ兄様のことを大切に思っているか知っていますか？」

我輩は目を丸くした

「貧しくて、今にも死んでしまいそうだった私を助けてくれました。兄様も同じように苦しんでいたのに、澄ました顔で私に食べ物を分けて下さいました」

リヒテンは表現を変えないまま、ただ淡々と昔話を語る

「ずっと。ずっと傍にいたいと、心からそう思っていたのは私だけだったのですか？」

リヒテンはそう言つと手を差し出した

我輩はほつけた頭のままにその手を掴んだ

リヒは力強く引つ張り上げた

そして我輩が立ち上がった瞬間

リヒテンはその手を急に離れた

我輩は再びアカンサスの花びらを散らすことになった

「つつ…リヒ!？」

「もう兄様なんか知りません。先に帰ってます」

リヒは小箱を我輩に投げつけて駆けて行ってしまった

「…どういうことなのだ？」

我輩が花びらに埋もれながら空を仰いでいると

「…どういふことです」

「どーも」

「…貴様等見てたのか」

本田がギリシヤの手を引つ張って我輩の前に差し出す

指輪…先程のあれだ

「バツシュさん、よくみて」

「む、これは」

我輩は眉を寄せた

ギリシャの指輪には文字が刻まれていたのだ

” s a m p l e ”

それは愛の意味を持つ言葉… な訳がない！！

「本田、これまで何が起きていたか説明しろ」

本田は面倒くさげに事件の概要を話した

ギリシャはただの相談相手だった 我輩の誕生日（全く覚えて
なかった）プレゼントを決めるために。

ギリシャはリヒテンの話を聴きつつこっくりこっくりしていたらリ
ヒテンはそれを同意と取って、いつの間にかプレゼントはペアリン
グになっていたという（なんだ！！それ。そしてギリシャ、話くら
いまともに聞け、）

そしてサンプルをギリシャがしている理由は…ギリシャの小指と我

輩の中指の太さが同じだから(∴。)

話を聴き終わり、我輩はひどい脱力感に襲われた

「つまり、本田。我輩達はいらぬ心配をして駆けずり回ったあげくここに至る、と」

「はい」

「我輩が焦ったのも、昨日一晩中頭を悩ませたのも、全部骨折り損だった、と」

「私なんか涙までうつかり流してしまいましたよ？」

本田は黒く笑った

ギリシャがあくびをしながら「ねえ菊、俺もう帰っちゃだめ？」と言っていた

我輩はなんだか笑えてきて一人乾いた笑い声をあげた

二人は気味悪いモノをみたような表情の顔を見合わせ、互いに肩を

竦めて苦笑いをした

三人の疲れた笑い声は寂れた公園によく似合った

「さて、私はもう帰りますね」

「俺も」

「ああ、迷惑をかけたのである。本田。…ギリシャも、すまなかった」

「いいえ」「別にー」

そういつて我輩と本田達は別の道を帰っていく

そうだ、我輩は帰るのだ
むくれたリヒの待つ家に。

「おい、本田、ギリシャ!!」

だいぶ距離が開いてしまったために大声で二人の背中に呼び掛ける

「なんですかーあ」

本田が口に手を当てて間延びした返事を返す

ギリシヤも隣であくびの涙を擦りながら振り向いた

我輩は大きく息を吸い込んで

「リヒは…ペアリングの片方を今してると思ってた？」

と問うた

二人は顔を見合わせ

本田は着物で忍び笑いをかくし

ギリシヤは前髪を弄んだ後に

両手で大きな”丸”を描いた

我輩はにやけた顔を隠すために二人に背を向けたまま敬礼をした

港街の夕暮れの風はどこからか懐かしい気持ちを運んだ

そして走り出す

大切な、大切な、
たった一人の我輩の妹の元へ。

-
-
-
-
-
-
-
-
F
i
n
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

ソノ二（後書き）

初めてリヒテンとバツシュで書いて見ましたが、皆さんの満足いく作品になったでしょうか…

今回は登場国全員に語り部になっていただきました（笑）

私は菊視点が一番書きやすいのですが…。

”それぞれの幸せ”が今回のサブテーマでした

バツシュはリヒテンがギリシャの元に行くのが本当の幸せなのではないかと悩み、

リヒテンは兄様がいるだけで幸せで、

本田はバツシュの幸せを祈って涙し、

ギリシャは人への愛が自分への幸せに繋がることに少しだけ感動します。

幸せは難しいテーマです

一人一人、それぞれに違った幸せがあり、私の求める幸せと貴方の求める幸せがぶつかったとき、必ずしも二人とも幸せになれるかはわかりませんから。

うーむ、ふかい

そして話がそれてしまった

とにかくラストで「なんだそのオチは！！」と思って頂けたなら私
の中では大成功です

つぎはリクエストがあったのでアルの話を書くとおもいます

では 次作で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6002m/>

君が僕を待つなら～リヒとバッシュの場合～

2010年10月9日19時00分発行